

藩のために命を懸けた人々

相原孝行

目次

- 1 序
- 2 桜田門の変
- 3 桜田門の変から会津戦争まで
- 4 会津戦争
- 5 会津戦争後

1 序

本稿の目的は当時の幕末において主君のために命を懸けて主君の汚名返上のために行動した水戸藩士や薩摩藩士たちがいたこと、そして会津藩を守るために若い命が失われたこと、そして日本最大にして最後の内戦である戊辰戦争に先をあてることにある。

2 桜田門外の変

桜田門外の変発端は黒船などの列強国の接近である。これにより国内は大きく二派に分かれた。すなわち、外国の侵略に対処し、天皇中心の国家体制を望む尊王攘夷派と西洋諸国との実力の差を理解し、開国要求の拒否は不可能と判断した開国派である。しかし、列強との格差を実感した攘夷派はやがて武力によって徳川幕府の打倒を目指す討幕派になっていく。

討幕派を代表する薩摩や長州に対し、従来通り徳川將軍家を頂点とする統治形態を望む佐幕派を代表する会津や水戸が対した。両者の思想の衝突が流血の暗殺やテロ事件の火種となったことはいうまでもない。幕末の中で最も有名な事件が時の最

高権力者である大老井伊直弼が暗殺された桜田門外の変である。この暗殺事件を実行したのは水戸藩の脱藩浪士である。主な原因は以下の通りである。第一に水戸藩藩主である徳川斉昭が安政の大獄で水戸に送られ、蟄居とされ、二度と政治に顔を出せなくなり、水戸藩が屈辱をあじわったこと。第二に、水戸藩には尊皇攘夷派がおり、井伊直弼の無勅許条約締結に反発したこともあるといわれている。

ここで水戸藩の脱藩とはどのような意味をもつのだろうか。脱藩とはその名の通りで、水戸藩でいえば水戸藩という国から抜けるということである。現代で言えば祖国を捨てるようなことで密航のようなものである。つまり、彼らは脱藩することで水戸藩に迷惑をかけないために命を懸けて行ったのである。しかしこの脱藩という行為は重罪で最悪の場合、処刑されたり、脱藩した者の家族が重い取り調べにあたりするなど大変リスクが高かった。一方で比較的脱藩に緩い藩もあった¹。

水戸藩は前者であった。このため脱藩し、暗殺事件まで起こした水戸浪士達を許すはずもなく、桜田門外の変後多くの浪士達がとらえられ処刑された。また処刑される前に暗殺実行時の負傷によりその場で絶命した者もいれば自刃した者もいた。

この事変後、幕府はその事後処理に迫られた。幕府と彦根藩は井伊直弼の死の理由を暗殺とは公表しなかった。時の最高権力者でもあった井伊直弼が暗殺されたと知られれば、混乱が起きることは明白だった。そのため彦根藩藩士達の間に主君を討たれた憤慨があふれ、一藩あげて水戸藩邸を襲撃しようとする

¹代表的事例として、長州藩の高杉晋作はなんと8回もの脱藩を行っていたという。志を持って行動をしたということから高杉は多くの脱藩を行うも処刑されず、座敷牢幽閉など比較的軽い刑に処されていた。改めて考えてみると、脱藩を重罪と考える藩もあれば多くの思想を取り入れ、新しい技術を会得して帰郷してくる者もいたため脱藩を黙認していた藩もいたことがわかる。

動きもあった。これに対して幕府は譜代筆頭の井伊家の家名に傷がつくことになるので堪え忍ぶように慰留した。また井伊家が暴発して水戸家と騒乱になれば、両家を改易せざるをえなくなる。それだけでなく井伊直弼の暗殺が表ざたになることを恐れた。そのため老中の安藤信正は冷静な事態收拾を図った。これにより井伊家は幕府の慰留により暴発を思いとどまり、直弼の一子愛麻呂（のちの直憲）の家督相続が認められ、彦根藩は安泰になった。

この時代は様々な思想が交錯し、桜田門外の変のような暗殺事件やテロ事件などが多発した。

3 桜田門外の変から会津戦争へ

桜田門外の変後、御三家である水戸藩と幕府の仲は陰悪となった（井伊直弼の暗殺を実行したのは水戸藩の脱藩浪士だったため）。しかし、その仲をどうにか取り持ったのが他でもない会津藩藩主松平容保であった。これにより幕府の権威失墜は明らかとなった。

さらに、桜田門外の変後、京都の治安は尊王攘夷論者達の反発により、悪化の一途をたどった。幕府側も京都には、京都所司代や町奉行が設けられ、彦根藩士と協力して市中の治安維持にあたる幕府勢力が幕府の要人を暗殺する行為（いわゆる天誅）も頻発していたため、反幕府勢力を抑えることは困難になりつつあった²。

その結果、京都には新たに京都の治安維持と御所の警備を担う京都守護職の配置が決定した。幕府は、京都守護職に徳川御三家のいずれかを充てるつもりであったが、そろって辞退したため、御三家に次ぐ会津藩主松平容保に白羽の矢がたった。容

²江澤隆志 『歴史 REAL 八重と会津戦争』（洋泉社、2012年）22頁～23頁。

保は初めは断ったものの、政治総裁職松平慶永が会津藩に伝わる「御家訓」を持ち出すことで容保を説得した。容保は文久3年8月に京都守護職を拝命し、12月には1,000余名の会津藩士を率いて上洛した。これにより会津藩は後に新撰組と協力して反幕府勢力を鎮圧していく³。

慶応3年(1867年)王政復古の大号令が発せられると(同時に小御所会議⁴も開かれる)、薩摩藩は浪士達に江戸で攪乱活動を指示し、旧幕府軍の挙兵を待った。その後、浪士達の相次ぐ略奪や暴行行為をみかねた旧幕府軍は薩摩藩邸を焼き払い、薩摩藩と旧幕府軍は交戦状態となった。薩摩藩の挑発に乗った旧幕府軍はやがて日本全体を戊辰戦争にまきこんでいく。

1868年1月3日戊辰戦争(1868年1月～1869年5月)の緒戦にあたる鳥羽伏見の戦いが勃発した。この戦いは、小御所会議で決定した、慶喜への処分への憤り、薩摩藩の挑発などから旧幕府軍が挙兵した戦いである。この戦いで旧幕府軍は薩摩・長州などの新政府軍相手に大敗を喫し、江戸へ敗走していく。そして戦いの舞台は京都から会津へ移っていく。

4 そして会津戦争へ

京都における会津藩の役目は反幕府勢力を徹底的に取り締まるというものだった。新選組を取り仕切り、厳しく追跡し、反幕府勢力にあたる人々を斬殺した。この出来事で最も有名な

³ 新撰組や会津藩は池田屋事件や蛤御門の変で活躍した。会津藩は薩摩藩と協力した8月18日の政変(尊攘派の公家三条実美や長州藩士、各尊攘派の志士を京都から追放した。)江澤・前掲・22頁～23頁。

⁴ 討幕派の岩倉具視を中心に徳川慶喜からの政権を奪うためクーデターを断行し、天皇は新政府誕生の宣言する王政復古の大号令を出した。

小御所会議では慶喜の処分や辞官納地(すべての官位を辞し、徳川家の全所有地を朝廷に納める)が決定した。大石 学・星 亮一『戊辰戦争と明治維新の真実』歴史人38号(2013年)12～13頁。

事件といえば、池田屋事件（長州藩の浪士達が、風の強い日に焼き討ちを決行、京都守護職松平容保を襲い、これを殺害し、その後孝明天皇を拉致して、革命政権を樹立せんとするという計画について池田屋で謀議中に新撰組と会津藩士が切り込んだ事件）である。血で血を洗う戦いだった。

会津戦争での新政府軍は長州藩や薩摩藩が主力であった。薩摩藩は一時会津藩と同盟関係にあったが、薩長同盟の締結で会津藩の攻撃に加わった。会津藩も徳川宗家に倣い、一時は恭順を示すも新政府軍の条件は会津藩主松平容保の首を差し出すことだった。東北各藩も会津藩を救うために、嘆願書を送るもすべて新政府軍に握りつぶれてしまった。そして会津藩は奥羽列藩同盟とともに新政府軍との戦いを決めた。会津藩の軍制は鳥羽伏見の戦いまでは長沼流の兵法による旧式の兵備だった。鳥羽伏見の戦いで会津藩は薩長軍の西洋式の軍制に圧倒的敗北を味わい、これでは薩長と渡り合えないとして 1868 年 3 月に軍制を改革し、装備を西洋式に改めた。年齢別に朱雀、青龍、そして玄武、白虎の 4 隊に編成した。朱雀隊は 18 歳から 35 歳までの精鋭で約 1200 人。青龍隊は 36 歳から 49 歳まで、士中 3 隊、寄合 2 隊、足軽 4 隊の約 900 人で編成した。玄武隊は 50 歳以上で、士中、寄合各 1 隊、足軽 2 隊の 400 人、白虎隊は 16 歳、17 歳の少年兵でこの隊も士中、寄合、足軽の各 3 隊に分かれ、ここは 1 隊が約 50 人、全体では 300 人程度だった。正規軍はこの 4 隊で、総数では約 2800 人だった。このほかに砲兵隊、築城隊、あるいは力士隊、獵師隊、修験隊、さらに農兵隊約 3000 人があったが、それらも加えても会津軍の総兵力は 7000 人にすぎなかった。数万とも数十万ともいう薩長新政府軍に対抗することは不可能であり、旧幕府軍や東北、越後の諸藩との連携以外に、戦う道はなかった。会津藩の本格的な戦いは白河だった。白河は東北の関門だった。白河の戦いでは二本松や棚倉兵を加えて会津藩は白河口に約 1500 人の大部隊を送

った。一方で薩摩の伊地知正治率いる薩摩、長州、大垣、忍の東山道軍約 700 人だった。数の上では会津側が有利であった。しかし、会津側の指揮官の不在、武器の劣悪、油断により、会津側は決定的な敗北を喫した。その後も会津若松への最後の砦・母成峠の戦いで奮戦するも板垣退助ら率いる新政府軍約 2000 人に撃破され、新政府軍は鶴ヶ城下へ進出した。8 月 23 日から 9 月 21 日までの約 1 か月間鶴ヶ城で籠城戦が繰り広げられたが城に残っていたのは 50 歳以上の老兵、薙刀を手に入城した婦女子と水戸の応援部隊 200 人ほどにすぎず、新政府軍と戦うも形勢逆転もできず、徐々に追い込まれて行く。白虎隊も前線に駆り出され奮戦したものの、新政府軍の攻撃になすすべもなく負けていった。白虎隊士中 2 番隊は飯盛山で燃える城下をみて自決を決意した。若い少年兵の命が失われた。そして食料も弾薬も尽き、9 月 21 日、会津藩は全面降伏した⁵。

5 会津戦争後

会津戦争後は土方歳三や榎本武揚ら旧幕府軍による五稜郭の戦いが最後の戦いとなった。武揚は 1869 年 5 月 18 日に降伏を宣言し、約 1 年半続いた戊辰戦争は終わりを告げた。戦死者数は戊辰戦争全体で東北諸藩を含む旧幕府軍 8625 人、新政府軍 4925 人にも上った⁶。こうして日本最大にして最後の内戦である戊辰戦争は多くの犠牲を出しながらも終結した。

やはり新たな時代を切り開くためには多くの犠牲を払わなければならないのであろうか。こうした時代背景をみていると、どの時代も大きな戦争や事件の後、新たな時代がきている。現代の平和は多大な犠牲を払っていることも忘れてはならない。

⁵大石学、星亮一「戊辰戦争と明治維新の真実」歴史人 38 号（2013 年）35～37 頁。

⁶ 前掲 15 頁。